

■問合せ 土木課 河川水防係 ☎0256・77・8274

## 大河津分水工事 着手に至るまで



▲「北越治水策」添付図面(一部拡大)

大河津分水が無かった江戸時代から明治時代にかけて、信濃川は3年に1度の頻度で決壊し、越後平野は洪水氾濫を繰り返していました。信濃川から日本海に水を注ぐ分水路を建設する計画が初めて江戸幕府に請願されたのは享保年間の頃。その後約150年もの間、私たちの先人たちは私財を投じて幕府や明治政府に要望し続け、1870年(明治3年)ようやく工事着手となりました。

### 私財を投じて請願、 着工も工事中止に

しかしながら、大河津分水ができるまで新潟港への河川水量が減少して水深が浅くなり、船の出入りができなくなりました。大河津分水が完成するまで、越後平野は洪水氾濫を繰り返していました。1875年(明治8年)に工事は中止することになりました。

立ち上がった  
長善館の門下生たち

工事中止後も洪水が繰り返し起きる中、1896年(明治29年)7月22日に大洪水「横田切れ」が発生しました。この大洪水では、越後平野一帯が泥の海と化し、農作物は全滅。チフスや赤痢などの伝染病も蔓延し、洪水による死者と併せて12000人を超える人が命を落としました。

これまでも建設に向けて請願を行ってきた越北の鴻都「長善館」の門下生たち。この洪水後、彼らの働きかけにより大きく動き出します。

門下生の一人、高橋竹之介は1897年(明治30年)に『北越治水策』を発表。越後平野に大河津分水をはじめ、関屋分水や刈谷田川分水の整備の必要性を記しています。

同じく門下生で当時、国會議員だった萩野左門や大竹貫一らは帝國議會で越後の治水の必要性を訴えました。



# 来年、「大河津分水」は 通水100周年を迎えます

全国には、荒川(東京)や、淀川(大阪)、北上川(宮城)、石狩川(北海道)など、河川の越水による洪水を防ぐために人工的に造られた放水路があります。

それらと大河津分水が違うのは、地域の人々が幾度の水害と闘いながら、分水路の整備に向けて立ち上がり、民意主導で建設を実現してきたことです。

大勢の先人たちの願いと努力によって造られ、越後平野を水害から守っている大河津分水。来年8月25日に通水から100周年を迎えるにあたり、分水路の今昔に触れてみたいと思います。

写真：大河津可動堰

## 日本一の大河の洪水から 越後平野を守る分水路

### 人工的に造られた 大河津分水

日本最長の河川、信濃川。その長さは367kmで上越新幹線の新潟ー東京間と同じくらい。1年間に流れる水量も約159億m<sup>3</sup>と日本一です。この大河の洪水から越後平野を守るため、人工的に造られた河川が大河津分水です。信濃川本川にある洗堰は、信濃川下流へ生活や農業などに必要な用水を毎秒270m<sup>3</sup>に調節して流しています。

いざ洪水時には、大河津分水にある可動堰のラジアルゲートを開閉して日本海に放水します。ラジアルゲートの堰としては日本最大規模です。



写真：洗堰

※ラジアルゲート・・・表面が円弧状で、その曲線の中心を軸として回転することで開閉する構造のゲート。

## 長善館と大河津分水建設に尽力した門下生

大河津分水の建設に向けて議論し、東奔西走しました

「長善館」は、1833年に鈴木文臺によって粟生津村(現・燕市)に創設された私塾。楊軒、柿園、彦嶽の先生が閉館までの約80年間にわたり、約千人の塾生を教育しました。初代館主の文臺は良寛とも親交があり、中国の古典を中心に教え、政治家や医学者、漢文学者など多方面で活躍した門下生を輩出しました。



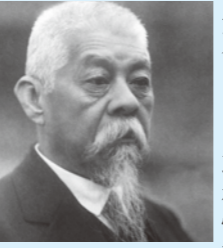
わしおまさなお  
鷺尾政直  
1841～1912  
黒鳥村(現・新潟市)出身  
治水運動を推進。治水に関する実務を重ね「西蒲原郡治水起工議」を作成、提言した。



たかはし takekazu  
高橋竹之介  
1842～1909  
杉之森村(現・長岡市)出身  
『北越治水策』をまとめ、山縣有朋や松方正義に大河津分水の建設を請願した。



はぎの さもん  
萩野左門  
1851～1917  
板井村(現・新潟市)出身  
政治家(国會議員、県議)として信濃川改良工事や新川掘削・改良に尽力した。



おおたけ かんいち  
大竹貫一  
1860～1944  
中之島村(現・長岡市)出身  
政治家(国會議員、県議、村議)として横田切れの惨状と分水路整備の必要性を訴えた。